

# 助詞・助動詞の辞典

森田良行・著



東京堂出版



助詞・  
助動詞  
の辞典

森田良行・著

東京堂出版

●著者紹介

森田良行（もりた・よしゆき）

一九三〇年一月生まれ。早稲田大学大学院修了。国語学専攻。二〇〇〇年、早稲田大学を定年退職。在職中は外国人留学生への日本語教育と日本人学生への日本語学の講義に携わり、また早稲田大学日本語研究教育センターの初代所長を務めた。現在、早稲田大学名誉教授。博士（文学）。

主な著書に、

- 『日本語の類義表現辞典』（東京堂出版）
  - 『動詞・形容詞・副詞の事典』（東京堂出版）
  - 『基礎日本語辞典』（角川書店）
  - 『日本語の視点』（創拓社）
  - 『外国人の誤用から分かる日本語の問題』（明治書院）
  - 『日本語をみかく小辞典』（全三巻、講談社現代新書）
  - 『日本人の発想、日本語の表現』（中公新書）
  - 『言語活動と文章論』（明治書院）
  - 『動詞の意味論的文法研究』（明治書院）
  - 『意味分析の方法』（ひつじ書房）
  - 『日本語文法の発想』（ひつじ書房）
  - 『話者の視点がつくる日本語』（ひつじ書房）
  - 『日本語質問箱』（角川文庫）
- など

助詞・助動詞の辞典

二〇〇七年 九月二五日 初版発行  
二〇一〇年 六月三〇日 三版発行

著者 森田良行（もりた・よしゆき）

発行者 松林孝至

発行所 株式会社東京堂出版

〒一〇一・一〇〇五一  
東京都千代田区神田神保町一・一七  
電話〇三・三二三三・三七四一  
振替〇〇・一三〇・七一・二七〇

編集協力 日本アイアール株式会社

DTP 印刷製本 図書印刷株式会社

ISBN978-4-490-10727-2 C0581  
©Yoshiyuki Morita, 2007, printed in Japan  
JASRAC #H0711766-002

## はじめに

嘘か真か定かでないが、江戸時代の歌人、香川景樹のもとを訪ねた某氏が、自信の句作を示して、意見を問うた。その作とは、

米洗ふ前に蛍の二つ三つ

というのであるが、誉められるとばかり思っていた期待に反し、景樹は「前に」の「に」のところに「前を」と朱を入れて、返したという。

今日では、米は「洗う」ではなく「とぐ」と言うけれども、その「といでいる前に」とくれば、どうしても「蛍が二つ三ついる」と続けたくなる。しかし、これでは、蛍は静止してその場所に留まっている情景しか浮かばない。助詞の「に」は一方で「前に在る」のような存在を表す言い方もあるためである。そこで、動きを与えるために「前を」と変えれば、確かに「飛んでいる」行為が加わって、句が生きてくる。しかも、「二つ三つ」とあるから、飛び交う姿まで脳裏に浮かんで、躍動する生命が如実に句に写されてくる。同じ、動きを与えるにしても「前へ」であつたなら、近寄つて来る直線的な移動のみで、飛び交う曲線の、あの蛍の動きは活写されない。たかが助詞一つと思われがちだが、これら格助詞の使い方が表現に与える影響は量り知れない。

助詞の効用は何も俳句に限つたことではない。例えば宮沢賢治の有名な詩「雨ニモマケズ」に出てくるあの「モ」はどんな働きをしているのだろうか。後に「風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケ

又」と来るから、「ああ、風や雪に対して「雨にも」なんだな」と、対比の働ぎと考えたくなる。だが、「今日は雨にも負けず頑張った」に対比の意識はない。そう言えば「茶摘」の「夏も、近づく八十八夜」にも対比する言葉は出てこない。助詞の使い方は、理屈ではなく感情に支配されるから、一筋縄ではいかない。「夏が近づく」の理屈も「夏も、近づく」と言えば、到来する夏を深く感じ、近づく夏を意識する心が「も」に集約されていると感じるのである。「宴も、たけなわ」「気も、そぞろ」「折も、折」など皆このような心の現れと言つてよいであろう。

日本語にはこのような、述べ綴っている意味内容に加えて、話者や書き手の心の有り様を添える言葉が発達していて、表現に奥行きを与え、叙述を多彩なものに仕立てあげている。いわゆる“辞”とか“付属語”とか言われるたぐいの言葉、とりわけ助詞と助動詞にその特徴が顕著に現れる。例えば「これが良い」を「これで良い」と言い換えれば意識はどう変わるか。さらに、その叙述に対する話者の受け止め方を相手に伝える方法として、文末に種々の助動詞を添えるなど、日本語には表現を多様化する語が多い。「これが良い」なら、推量の助動詞を添えて、

これが良い／良さそうだ／良いようだ／良いだろう／良いかもしれない／良いにちがいない／良  
いはずだ／良かろう

少し意味は違うが、「良いらしい／良いそうだ」など微妙に違う話者の判断を言葉に載せる。いわば助詞や助動詞は、日本語の表現にとって、言葉に肉付けをしていく重要な役割を果たしているといふわけだ。が、それは使い様によつては時に贅肉ともなりかねない。したがって優れた日本語の使い手となり理解者となるためには、その機能を十全に発揮できるだけの知識の習得と修練とが課せられ

るといふことにもなる。いったい「良さそうだ」と「良いようだ」とではどう意味が異なり、それぞれをどのような場合に使えば、適切な表現となるのだろうか。同じ自信を持つて下す判断にしても、「良いにちがいない」と「良いはずだ」では判断の根拠が異なるはずである。どう異なるのか。考えてみれば、わかっているようで案外と理解していない事柄が多いことに気付く。「それは辞書で調べればよい」と言われるかもしれない。が、一般の国語辞典では、箇条書き的に個別の意味が列記されているだけで、その語の発想や全体を通しての意味、類義の語との使い分けまでは説明されていない。生の用例や成句などもほとんど挙がっていない。文法辞典では活用形式や他語との接続の規則などはわかるが、意味と文法との関連や文型については触れられていない。そのような、理解のための辞書とは別に、表現にも役立つ辞書、とりわけ助詞や助動詞を意味や表現の面からも扱った辞書が求めらるのである。幸い東京堂出版編集部渡部俊一氏も、著者の目指す辞典には賛成で、その刊行に向けて鋭意努力を惜しまれなかったのである。本書の趣旨を理解し、十全の活用を期待したい。

二〇〇七年九月

著者

助詞・助動詞の辞典◎目次

はじめに……………一  
 プロローグ……………一七

第一部 助動詞編

せる・させる〔使役〕……………二四

- 一、はじめに 二四
- 二、使役と他動詞との区別 二五
  - ◆「す」形を取ることわざ・慣用句
- 三、文型変換から見た使役文型 二七
- 四、「せる／させる」文型の種類 二九
- 五、動詞と「せる／させる」の意味関係 二九
- 六、「せる／させる」文型と意味との関係 三四

◆語性と使役の意味との関係

◆述語動詞と使役の意味との関係

「られる」表現のいろいろ……………四〇

- 七、「せる／させる」文型の拡張 三六
- 八、「く／させる」か「を／させる」か 三九
- 一、自発・可能・受身・尊敬が同じ形式の日本語 四〇
  - 四〇
- 二、受身も可能も尊敬も同じ形の日本語 四一
- れる・られる〔自発〕……………四三
  - 一、自発の意味 四三

四三

二、自発の例 四四

三、自発的な意味を持つ表現 四五

られる「可能」

四五

一、可能の意味 四五

◆可能文型と自動詞文型との関係

二、可能形式の種類 四七

三、活用形式と可能形 四八

四、「くられる」の可能とは 四九

1、自発性の可能 四九

2、許容性の可能 四九

◆可能の意味の展開

◆困難な事態の実現・許容

3、能力所有の可能 五一

◆意志性の有無

五、可能文型 五二

1、同じ語形の可能動詞と自動詞 五二

2、ラ抜き言葉 五三

六、可能表現となる慣用表現・ことわざ 五三

れる・られる「受身」

五五

一、日本語における受動の発想とは？ 五五

1、能動態と受動態 五五

◆受身動詞

2、受動態の有り様 五六

二、日本語の受身文型 五七

三、迷惑の受身と被害の受身 五八

1、間接受身 五八

2、被役・受益・非受益の受身 六〇

◆慣用句の例

3、被害の受身 六一

◆「くられる」を導く助詞「に」と「から」

◆受身の発想の日本語

4、非情の受身 六四

◆「からくられる」と「によってくられる」

5、結果の様態を表す非情の受身 六五

◆抽象名詞による非情の受身例

◆古代の非情の受身

◆まとめ



四、受身は他動詞の自動詞化にも用いられる 六八

五、「ている／である」表現と受身 六九

1、られる＋テイル／テアルの種類 六九

2、「受身＋テイル／テアル」の三つの型 七〇

3、各形式の用法と言い換えの可否 七〇

六、受身・自発・可能の歴史 七二

### れる・られる【尊敬】……………七三

一、敬語の成立する背景 七三

二、尊敬「れる／られる」の性格 七四

◆「られる」敬語の誤用

### たい・たがる【希望】……………七六

一、「たい」「たがる」の発想 七六

二、希望「たい」の用法 七七

1、「たい」の文語形 七七

2、「たい」文型（「が／たい」と「を／たい」） 七七

### ない・ぬ【打消】……………八〇

一、形式・意味から見た否定 八〇

1、否定表現とは 八〇

2、否定的意味の形式 八一

◆形容詞「ない」と助動詞「ない」との区別

3、意味面における否定——負極語（負相語） 八二

◆否定形式と語種との関係

4、形は否定形だが、意味が打消とならない

場合 八二

5、「ない」表現の表す意味 八三

二、形容詞の「ない」 八四

1、「ない」の意味分類 八四

2、「ある／ない」「いる／いない」の使い分け 八五

3、否定表現と「は／も」の添加 八五

三、問答の型と否定表現との関係 八六

1、否定使用の場面 八六

2、否定によるテンス・アスペクトの移行 八七

四、打消と呼応する副詞 八八

◆打消を事前に予告する副詞

五、打消に関するさまざまな問題 九〇

1、打消と「です／ます」体 九〇

2、「～なくて」と「～ないで」の使い分け 九一

3、「いけない」と「ならない」 九一

4、否定の位置 九二

5、二重否定 九三

六、「ない」を含む慣用的な表現文型 九四

七、否定形式の慣用句 九四

1、形容詞「ない」を伴う慣用句 九四

2、否定形式の慣用句・打消の助動詞を伴う

慣用句 九五

### ない・ず・ぬ・ざる【打消】……………九六

一、打消「ず」の用法 九六

◆活用形の説明

二、否定表現の形式 九七

◆二様の義務の言い方

三、打消を含む固定した言い回し 九八

1、一つの言い回しに見られる「ず」の例 九八

2、「ず」で打ち消す形のことわざ 九八

3、一つの言い回しや格言に見られる「ざる」の例

九九

4、一つの言い回しや格言に見られる「ぬ」の例

九九

### た【確述】……………一〇〇

一、概観 一〇〇

二、「した」の意味と機能 一〇二

三、「した」文型の種類と意味 一〇三

四、確述表現が回想意識を伴う場合 一〇五

五、「している／してある」文型と「た」 一〇九

六、言い切り形「した」文型の意味分類 一一〇

七、複文における「した」の働き 一一一

八、連体修飾「した名詞」形式 一一二

九、条件形（仮定形）の「たら」 一一四

1、「なら／ば／と」との比較 一一四

2、「したら」条件の意味 一一五

3、「したら」条件の発想と意味 一一五

◆補足説明

十、動詞の音便に伴う「た」の濁音化 一一六

◆撥音便の機構

らしい・う・よう・そくだ・ようだ〔推量〕

付 だろう・かもしれない・ちがいない・はずだ・

つもりだ…………… 一一八

一、概観 一一八

二、文脈差による推量表現の差異 一一九

1、う／／よう／つもり 一一九

◆状態移行を表す用法

2、らしい／／ようだ 一二〇

◆「ようだ／らしい／そくだ（伝聞）／かもしれない」

の可否

3、そくだ／／かもしれない 一二二

4、はずだ／／ちがいない 一二三

5、さだろう／／かもしれない 一二四

三、推量表現と副詞との関係 一二五

◆問題とする副詞類

四、各形式における「タ」形、打消形、丁寧形 一二〇

◆補説

べし〔当然〕

付 まじ・じ・まい・ん…………… 一三三

一、文語体での「べし」 一三三

二、口語体での「べし」 一三三

三、古代語を受け継ぐその他の推量の助動詞 一三五

1、否定推量「まじ」「じ」 一三五

2、まい（否定推量） 一三六

3、推量「ん」 一三六

ようだ・ごとし〔比況〕…………… 一三七

一、比況とは 一三七

二、比況の種類 一三七

1、直喩「うような／／ように」形式 一三七

◆慣用的な比喩の例

2、直喩「うごとき／／ごとく」形式 一四三

そくだ〔伝聞〕…………… 一四五

一、推量と伝聞との違い 一四五

二、伝聞の意味 一四六

だ・である「断定」……………一四七

一、断定の性格 一四七

二、断定の助動詞と形容動詞との差 一四八

三、「くなら」条件法について 一四九

1、仮定条件の発想と種類 一五〇

◆各条件形式の比較

2、「くなら」の発想と意味 一五一

◆各表現法の発想

◆断定の「なら」と伝聞の「なら」

◆「なら」と「たなら」の使い分け

四、「である」について 一五三

◆文体の確立について

です・ます「丁寧」……………一五五

1、丁寧の意味 一五五

2、「です・ます」の使い分け 一五五

3、複文における丁寧体の在り方 一五六

4、丁寧体の現れる語 一五六

5、「ございます」体について 一五七

## 第二部 助詞編

### は〔係助詞〕

付が(主題と主語)……………一六〇

一、「は」と「が」の文法的相違 一六〇

1、係助詞・副助詞 一六〇

2、主題を示す「は」と主語の「が」 一六〇

二、語の意味と「何ハ述語」文型との関係 一六一

1、「ハハ」の判断文の発想と使用語彙との関係

一六一

◆固定観念となった判断文

◆現象文と転位文

2、対比判断の「ハハ」 一六三

3、主語・述語に立つ名詞の意味関係によって

決まる述定型と同定型 一六四

4、同語反復文(「AハAだ」文型)について 一六六

◆同語反復文の意味

三、複文における「は」「が」と名詞の意味 一六七

四、「AハBガ何だ」文型の種類と用法 一六八

五、「ハハ」文型と疑問詞の位置 一七二

六、「は」「が」の使い分け 一七三

1、使い分けの基準 一七三

2、複文構造におけるハ・ガ 一七六

七、「は」の主題を表す以外の用法 一七八

◆「をば」「をも」の用法

◆その他の特殊用法

も〔係助詞〕……………一八〇

◆対比の形で「も」を用いる慣用句の例

◆「ももも」形式の慣用表現

まで〔副助詞・格助詞〕……………一八四

一、「まで」の意味 一八四

二、副助詞「まで」と格助詞「まで」との相違 一八五

三、副助詞「まで」の発想 一八七

四、複合格助詞「までに」と「までで」 一八八

◆「までで」の発想

さえ【係助詞】……………一九〇

1、係助詞「さえ」の発想 一九〇

2、「さえ」の表現について 一九〇

しか・すら・だに【副助詞】……………一九二

こそ【係助詞・副助詞】……………一九三

など・でも【副助詞】……………一九五

1、「など」の意味と用例 一九五

2、「でも」の意味と用例 一九六

のみ【副助詞】……………一九七

だけ【副助詞】……………一九八

一、「だけ」文型の発想と話者の視点について 一九八

二、「だけ」の意味と用法 一九九

1、文脈の違いから見た「だけ」の用法 一九九

2、各用法の特徴 二〇〇

◆「だけ」と格助詞との承接関係

◆「でだけ」と「だけで」

◆「だけに／だけあって」

ばかり【副助詞】……………二二一

一、「ばかり」の表現について 二二一

二、文脈の違いから見た「ばかり」の用法 二二一

三、各用法の特徴 二二二

◆「ばかり」と「だけ」

ほど【副助詞】……………二二九

一、「ほど」の表現について 二二九

二、文脈の違いから見た「ほど」の用法 二二〇

三、各用法の特徴 二二〇

◆「ほど」と「くらい」の差

◆強調と比較の差

◆ 比喩による慣用的表現

◆ 「ほど」を用いた比喩の例

くらい【副助詞】……………二三八

一、「くらい」の表現について 二二八

二、文脈の違いから見た「くらい」の用法 二三八

1、「くらい」の意味分類 二二八

2、「くらい」の意味 二二九

3、「くらい・ほど・ばかり」の比較 二三五

の【格助詞】……………二四五

◆ 「〜が〜である」文型と「〜を〜である」文型

二、主格を表す「の」 二四三

一、連体修飾形式としての「の」 二四五

1、「AのB」形式について 二四五

2、接続から見た「AのB」 二四五

3、意味から見た「AのB」形式 二四六

◆ 意味関係からの分類

◆ 「AのB」連体修飾の分類

4、「AのB」文型についての追加説明 二四八

5、漢語の意味関係 二四八

二、連体修飾の拡大 二四九

三、助詞「の」の助けによる句形式の連体修飾

二五〇

四、連体詞、および連体詞的な修飾用法 二五〇

五、「AのB」形式の隠喩および慣用的な句の例

二五〇

が【格助詞】

付の(主格)……………二三六

一、「が」 二三六

1、ガ文型の種類 二三六

2、「〜が」の現象文の発想と使用語彙との関係

二三七

3、「〜が」の転位文とその使用語彙について

二四〇

◆ 主述に立つ名詞の意味関係と転位文の種類

4、主格以外を表す「が」 二四一

## の【準体助詞】

付 こと(形式名詞)……………二五二

一、準体助詞とは 二五二

二、準体助詞「の」と形式名詞との差異 二五三

1、「の」と「こと・もの」の機能差 二五三

2、「の」と「こと」との置き換えの可否 二五四

三、文型から見た準体助詞の用法 二五六

## を【格助詞】……………二五七

一、「を」の歴史と対象格 二五七

二、格助詞「を」の意味 二五八

1、動詞を導くヲ格文型 二五八

◆「ヲ」格文型の種類

2、動詞を導く「を」の意味 二五八

三、共起する語から見た「を」 二六〇

四、「を」と他の助詞との使用上のゆれ 二六一

◆「終わる」「終える」のゆれ

## に【格助詞】……………二六二

一、文型から見た二格 二六二

1、動詞・形容詞を導く二格文型 二六二

2、形容詞を導く二格文型の意味 二六三

◆「に」に形容詞「文」の例

◆「に」に形容動詞「文」の例

◆「に」を取らず、「と」「から」を受ける例

二、対人関係等における「に」と「を」の差 二六四

1、共起する語から見た「に・を」 二六四

◆「ヲ」と「ニ」の使い分け

2、二様の格助詞形式 二六五

◆肯定・否定、可能での助詞「に／を」の非対応

三、「に」と他の助詞とのゆれ 二六六

1、「に」と「を」のゆれ 二六六

2、「に」と「で」のゆれ 二六七

## に・へ【格助詞】……………二六七

一、「に」の意味 二六七

二、共起する語から見た「に・までに・へ」 二六七

三、動詞を導くへ格文型 二六九

四、疑問のある「に」の使い方 二六九



## から・まで【格助詞】……………二七〇

- 一、「から・まで」の意味 二七〇
- 1、「から」の例 二七一
- 2、「まで」の意味 二七二
- 二、動詞を導くカラ格文型 二七一
- 三、共起する語から見た「から・まで・で」 二七二
- 四、カラ格のゆれ 二七三

## より【格助詞】……………二七四

## で【格助詞】……………二七五

- 一、動詞を導くデ格文型 二七五
- 二、共起する語から見た「で」 二七五

## と【格助詞】……………二七七

- 一、動詞・形容詞を導くト格文型 二七七
- 二、共起する語から見た「と・で・に」 二七七

## と・にとか・や・やら・なり・だの・たり【並立助詞】

付 も・ても・か……………二八〇

- 一、日本語の並立表現 二八〇
- 二、並立助詞のいろいろ 二八一
- 1、「と」の意味と用法 二八一
- 2、「に」の意味と用法 二八二
- 3、「とか」の意味と用法 二八二
- 4、「や・やら」の意味と用法 二八三
- 5、「なり・だの」の意味と用法 二八三
- 6、「たり」の意味と用法 二八四
- 7、「も」の意味と用法 二八五
- 8、「ても・でも」の意味と用法 二八五
- 9、「か」の意味と用法 二八六

## て【接続助詞】……………二八六

- 一、「て」の発想と意味 二八六
- 二、条件形式以外の「て」の意味と用法 二八七
- 1、文法機能上や語彙関連としての「て」 二八七
- 2、文の展開にかかわる「て」 二八八